

大阪インターナショナルチャーチ

2016/7/10

喜びをもって天国と復活を待ち望む

ピリピ 3:20 - 4:1

ケビン・シェパード牧師（生駒インターナショナルチャペル）

導入

おはようございます。今朝、神のみことばから希望のことばを皆さんと分かち合えることをうれしく思います。先週来たクリス・モモセ牧師から、皆さんととてもよい交わりを持てたと聞いていましたので、今回は私が来させていただきます。光栄です。

スライドを見てお気づきだと思いますが、生駒インターナショナルチャペルでは、ピリピを学ぶ中で、喜びというテーマにスポットを当てています。

今週、OIC のウェブサイトを見ていて、マッケナ牧師のお正月のメッセージがピリピ 3 章からだったことを知りました。そのメッセージの中で、この手紙は「クリスチャンに喜びをもたらす、キリストのような考え方」についてだとおっしゃっていました。

早いもので 2016 年も半分か過ぎてしまいました。皆さんの喜びメーターはどこを指しているでしょう。満タンでしょうか。半分くらいでしょうか。それともガス欠状態ですか。

イエスについていく私たちには明るい未来が待っています。今日のメッセージをとおしてその未来をもっと真剣に望むようになりますように。そして、私たちが喜びに満ち溢れますように。

今日はじめに、フローレンス・チャドウィックという女性のお話をしたいと思います。この女性は、イギリス海峡をイギリスとフランスの両方から泳いで渡った最初の女性です。この時、24 年間破られなかった世界記録より 1 時間も短い記録を出しました。1951 年のことです。

翌年、彼女はカタリナ島からカリフォルニアの海岸まで約 42km を泳ぐことに挑戦しました。しかし、泳ぎ始めて 15 時間後、濃霧に視界を遮られてしまいました。疲労と寒さにフローレンスは水から出してほしいと言いましたが、伴走するボートに乗っていた母親は、岸はもうすぐだから頑張れば行けると言いました。

フローレンスはその後 1 時間泳ぎつづけましたが、肉体的にも精神的にも疲労困ぱいし、挑戦を断念してボートに引き上げられました。

ボートに上がった彼女は、岸がたったの 1km 先だったことを知りました。

フローレンスは翌日の記者会見で、「霧で何も見えませんでした。…もし岸が見えていたなら、きっと泳ぎ切れたと思います」と言いました。

このお話をご紹介したのは、信仰生活でも同じようなことが起きるからです。

神との歩みで絶好調の勝利を収めたとしても、疲れ果ててしまったり、霧に遮られて何も見えなくなったりすることがあります。どこに向かっているのかわからなくなり、あきらめてしまいたくなります。

将来について、そんなふうに感じている人がここにもいるのではないのでしょうか。

パウロは、ローマで投獄中にピリピの手紙を記しました。ひどい境遇に置かれていても、彼は目指すところを見失いませんでした。このころ、ピリピにいる信徒たちもまたたいへんな試練に遭っていました。そんな彼らを励まそうと、パウロはこの手紙を送ったのです。きっと、ピリピのクリスチャンがゴールをはっきり思い描けるようにしてあげたかったのでしょう。試練という霧の中でもそこを目指して前進していくためです。

パウロはそのために、今朝私たちが読む聖書箇所を記しました。

聖書における復活

20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。 21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。 4:1 そういうわけですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。どうか、このように主にあってしっかりと立ってください。私の愛する人たち。

ここには、天国について重要なことが記されています。この個所を学ぶ中で、天国に関するあらゆる誤解も晴れるかもしれません。ただし、私が天国のすべてを悟っているわけではないことを先に申し上げておきます。

コリント第一 2 : 9 にはすばらしい約束が記されています。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。

私たち人間の能力では、天国がどれほど輝かしい場所か考え及びません。けれども、「聖なる空想」に大いなる余地がある一方で、聖書から多くを知ることにも可能です。

ピリピの背景

ではまず、パウロの手紙を受け取った人々が住んでいた場所の歴史的背景から見ていきましょう。

ピリピはギリシャ北部に位置するローマ帝国の領地でした。東方のローマ帝国領地とローマを結ぶ主要街道に面していました。

近代の植民地と同じく、支配者（この場合はローマ皇帝）は現地の人々をしいたげて自らの権力を誇示しました。パウロが現れるおよそ 100 年前の紀元前 42 年、ピリピはユリウス・カエサルの暗殺後に勃発した激しい内乱の舞台となりました。

内乱に勝利した新たなアウグストゥス・カエサルは、ギリシャ北部にいた自分と多くの兵士たちにはもう何もすることが残されていないと思いました。そこで、彼らにピリピ周辺の土地を与え、ローマ帝国の植民地を再建させました。彼は、ローマ帝国から寝返らないように退役兵士を置き、事実上の軍事拠点を設置しました。

パウロが現れたころのピリピには、ローマ帝国の入植者の子孫と、ラテン語を話すエリートたちに町を乗っ取られたと毛嫌いする現地のギリシャ人が入り混じっていました。ピリピの入植者たちは、ローマ帝国の市民であることを誇りに思っていました。そして、ピリピでの市民生活になるべくローマのものに近づけようとしていました。その大きな要素のひとつは、皇帝崇拜の確立です。皇帝カエサルは、救い主であり主として崇められるべきだというものです。実際、当時の人々はローマ帝国の都市に入る際、カエサルに主として忠誠を誓わなければなりませんでした。

私たちの国籍は天にあります。

この背景を踏まえて、今日の個所を学びましょう。

まず、パウロはピリピ 3 : 20 で「私たちの国籍は天にあります。」と語りました。

多くの人はこの個所が、「ですから、私たちが本当に属する天国に行ってそこで永遠を過ごすまでは地上で頑張らなければ」という意味だと考えます。

私もそうでしたが、そういう意味だと思った人は他にもいませんか。

けれども、それはまったく正反対だということに私は気づきました。

もしピリピにいる人が「私たちの国籍はローマにある」と言ったら、ずっとローマに住める日を楽しみにしているという意味ではないでしょう。むしろ、ピリピのようなローマ帝国の植民都市の目的は、ローマの支配をギリシャ北部にもたらすことです。ローマの文化や影響を拡大することです。もしそこで地元住民の反乱や「野蛮人」からの攻撃があったら、彼らはどうするでしょうか。皇帝がローマからピリピにやってきて敵を倒してくれること、そしてローマの栄光をあらわす町ができることを望むでしょう。それが 20 節でパウロがピリピの教会の人々に語った言葉の文脈です。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

クリスチャンの国籍は天にある、つまり、神の王国にあるのです。神が世界中のすべての教会に望まれることは、神の支配と権威をこの世にもたらすことです。

イエスは山上の垂訓の中でこれについて祈られました。

天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。 みこころが天で行われるように地でも行われますように。

ですから、教会は植民地のようなべきです。私たちが遣わされたところで神の影響をもたらし、神の御国を拡大するのです。私たちはまことの神の使節です。神の御国の使節として私たちに託されたメッセージがあります。

パウロはコリント第二 5 : 19-20 で次のように記しました。

神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。20 こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。

私たちはイエスがまことの良い王であることを宣言します。そして、神の御国が地上に来るという福音を喜びをもって分かち合い、神の支配のもとへと人々を招きます。

では、20 節から天国についてさらにいくつかの事柄を見てみましょう。

現在の天国

まず、天国はどこにあるのでしょうか。

地上の国籍は、ローマ、日本など、私の場合だとアメリカ合衆国ですが、具体的な場所を指します。そこで皆さんは、「じゃあ天国はどこにあってどんなところなの」と思っているのでしょうか。

私たちはなんとなく、天国は雲の上の宇宙のどこかにあると思っています。そのような曖昧なイメージを持つのは、人間の生まれながらの感覚で現在の天国をつかめないからです。

けれども、地理的に場所を限定できなくても、神のみことばの真理から、天国が存在することを知ることができます。また、お墓で終わりではないことを私たちは本能的に察知しています。

伝道者の書 3 : 11 にはこうあります。

神はまた、人の心に永遠を与えられた。

ここで、クリスチャンでない方に質問してみたいと思います。永遠というものを心で感じたことはありますか。人間の五感を超越した何かや誰かがいるのではと感じたことはありませんか。

お寺や神社などを訪れて、自分よりも大きな存在がいるのではないか、いるなら近づきたいと思ったことはありませんか。けれども家に帰って考えてみると、やっぱりそこには何もなかったと思ってむなしくなるという

経験をしたことはありませんか。神や仏を拜んでも、聞いてくれない、答えてくれないと感じたことはないでしょうか。

重大な不正や暴力事件などのニュースを見て、心から正義と平和を願ったことはありますか。今週もニュースを見てみると、この世はひどく傷ついていて深いむなしさを抱えていることは誰の目にも明らかです。そして、正義がついに勝利する日を誰もが願い求めています。

世の中の多くの人は気づいていませんが、これこそ、神の御国の正義が来ることを無意識に望んでいるということなのです。そして、その日はこの地上に必ずやってくるのです。これは多くの人にとって驚きであり希望でもあります。

しかし、この御国に入れてもらうには、自分の罪深い生き方に背を向け、創造主に罪の赦しを求める必要があります。自分の人生の王座から下り、王イエスの支配にゆだねなければなりません。このお方は、唯一まことの義なる良い王だからです。

まだそのステップを踏んでいないけれど、もっと福音について知りたいと思う人は、どうぞ信頼するクリスチャンの友人に話してください。

皆さん、天国に行くことを考える時、多くの人はそれ以上踏み込んで考えません。「天国に行ってイエスとともに幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし。おしまい」のような感じです。

けれども、本当はそれで終わりではありません。今朝はあまり詳しくお話する時間はありませんが、クリスチャンが「死んで天国に行く」ことについての基本についてお話したいと思います。

実際にはふたつの「天国」があるとわかると、今よりはっきり理解できるようになるでしょう。

ひとつめは、「現在の天国」です。そこは、クリスチャンの死後、人間の本質とも言うべきたましいが行くところです。これは体を持たない状態です。私たちの死んだ肉体はこの地上に残され、霊がイエスのご臨在の中で喜びと平安を体験します。

イエスはヨハネ 14 : 1-3 で弟子たちに次のようにおっしゃいました。これは皆さんもよく知るみことばです。

1「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

なんとすばらしい約束でしょう。けれども、多くの人はこれが永遠の終着地であり、そこで終わりだと勘違いします。

けれども、ここで「場所」と訳されたギリシャ語の単語「マネ」は、一時的な宿泊先を指します。つまり、最終目的地ではなく、そこにたどり着くまでの途上の宿場のようなものです。ルカ 23 章でイエスが瀕死の犯罪人に向かっておっしゃった「パラダイス」がこれに当たります。

42 そして[犯罪人は]言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

英国人神学者 N.T.ライトは、著書「驚くべき希望」で次のように記しました。

「ここでキリストが話しているパラダイスとは、私たちの最終目的地ではなく、死んだ者たちが新しいその日の夜明けを待ちながら、心と魂が癒され回復されるこの上もなく幸せな園、休息と安らぎに満ちた楽園である。」

ですから、イエスが再臨なさる前に死んだクリスチャンのたましいは、今私たちが「現在の天国」と呼ぶ場所で主のご臨在の中で安らいでいます。

では、私たちの最終目的地とはどこでしょう。現在の天国は具体的な地理を特定できませんが、みことばは、将来の天国がどこにあるかを明言しています。

イエスが私たちのもとに来られる

では、20 節を改めて詳しく見てみましょう。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

私たちは天から救い主が来られるのを待っているという部分に注目してください。

救い主がいつか世界中に御国を確立するために、この地上の植民地に来られるのです。これは、神がこれまで人類と関わられた方法と一貫性があります。

創世記 3 章を読むと、神は天から来られ、この地上のエデンの園で被造物であるアダムとエバとともに歩まれました。神のご臨在はずっと、あらゆるかたちでイスラエルの民とともにありました。福音書では、人の姿をした神であるイエスが天から来て人の間に住まわれました。このお方はインマヌエル、つまり「神がともにおられる」と呼ばれます。

そして黙示録 21 : 2-3 では、イエスが再び天から来られ、ご自身の御国を建てられます。

2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられる。

これが、神がこの地上に神の御国の支配を完全にもたらされるときに起こる、最終的な天と地の融合です。それは、罪とその影響が完全に取り去られた新しい世界です。

黙示録 21 章は続けてこう語ります。

彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

このようにして、

御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。

という私たちの祈りが成就します。

神の御国が来ることは、イエスが最初に地上に来られたときから始まりました。その御国はいつの日かその満ち満ちた姿を現します。そして、私たちは永遠のいのちの次の段階を新しく作り変えられた地上で始めます。

終わりのときに、いつどのような順序で物事が起こるかなどについてはあらゆる解釈や議論があります。しかし、どのように起こったとしても、最終的な結果は明らかです。イエスがいつか新しく作り変えられたこの地上を支配されるのです。そのとき、この地上はイエスの栄光と義で満ちます。これはイエスの復活によって確証づけられました。それは、私たちに将来起こることを示します。ではその内容を見ていきましょう。

私たちの復活の体

21 節から、天に国籍を持つクリスチャンのいやしい体を、イエスをご自身の栄光の体に変えてくださることがわかります。パウロはピリピ 3 : 10-11 ですでにこのことを示しました。この個所については、先週クリス牧師が皆さんにお話しました。そこには次のように記されています。

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

今度は 21 節で、死者の中から復活に達するのに伴う事柄をはっきりと示します。私たちのいやすく死ぬべき体は、イエスの栄光に満ちた死ぬことのない体に変えられます。これはパウロが気まぐれに書いた単なる曖昧なコメントではありません。

死からの復活に関するクリスチャンの信条は、聖書全体に見られるはっきりとした教えに基づいています。

実際、旧約聖書でもっとも古い書のひとつであるヨブ記でも、ヨブがこう語ります。

25 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。26 私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。27 この方を私は自分自身で見る。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。私の内なる思いは私のうちで絶え入るばかりだ。

あなたの内なる思いは絶え入るばかりでしょうか。

おわかりのように、復活については初期のユダヤの信仰にも見られ、新約聖書全体へと受け継がれています。使徒信条にも「からだの復活を信じます」とあります。

しかし、現代の多くのクリスチャンはこれをしっかり理解していないか、将来現実に起こることとして受け止めていないかのどちらかに見受けられます。

「ほんとうの天国」という著書でランディ・アルコーンは次のように語ります。

「クリスチャンは死者の中からの復活を”霊的な”、ぼんやりとしたイメージで考えてしまい、現実的には否定する傾向がある。教理として否定はしないが、その本質的な意味は否定している。つまり、物理的に現実に存在する宇宙において、私たちは”肉体、からだ”をもつ存在に、永遠によみがえることは否定してしまっているのである。しかし、これは自己矛盾である。肉体のない復活は、太陽のない夜明けのようなもので、そんなことはありえない。復活するなら、私たちには”肉体、からだ”が必ずある。もし肉体がないなら、私たちは”復活した”ことにはならない！」

まず、全体像に目を向けたいと思います。そうすれば、キリストに望みを置く私たちのためにどう物事が展開していくかがわかりやすいからです。

クリスチャンの死後についてもっともわかりやすく要約した内容が、テサロニケ第一 4 : 13-17 にあります。そこでパウロは次のように記します。

13 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで。15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。

ここで「眠った」と記されているのは、死を指しています。

では、次に 16 節から先を読みましょう。

16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

これがいつ起こるかは分かりませんが、出来事の順序はここに示されています。

キリストが戻られる、または現れます。これは、一般的に再臨と呼ばれます。

そのとき、キリストを信じて死んでいった歴代の信徒たちはすべてよみがえり、復活の体に入ったたましいと再会します。

それから、この地上に生きているクリスチャンが引き上げられ、私たちの体も一瞬にして先に死んだ人たちと同じような体に変えられます。

「では火葬された人の体はどうなるのですか」と思う人もいるでしょう。これはとくに日本では良い質問です。

ヒトゲノムを研究する科学者たちによると、個々の人間の体を形成するのに必要な情報はすべて DNA の中にあるそうです。ですから、DNA を含むたったひとつの細胞さえあれば、復活のときに体を再生するのに十分だと考えることができます。

もちろん、神はもともと無からすべてをお造りになったお方ですから、必要であれば元となる DNA がなくてもこの世に存在した体を再生することはおできになります。

私たちの復活の体についてもっとも詳細に記された個所はコリント第一 15 章です。これは、新約聖書の中でももっとも重要な個所のひとつだと思いますので、じっくり学んでみてください。15 章はとても長いので復活についてパウロが記したことすべてを見る時間はありませんが、代表的な個所をピックアップして見ることにしましょう。

20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。22 すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。

40 天上のからだ〔口語訳：天に属するからだ〕もあり、地上のからだもあり、天上のからだの栄光と地上のからだの栄光とは異なっており〔ます〕。… 42 死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらせ、43 卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらせ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらせ、44 血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。53 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。

これらの個所に記されていることを次のように要約することができます。

イエス・キリストは最初に死から復活し、キリストを信じて死んだすべての人は、イエスの再臨のときに復活します。

体には 2 種類あります。天の体と地上の体です。「朽ちる」体、「朽ちない」体とそれぞれ呼ばれます。

または、「血肉の」体、「御霊の」体とも呼ばれます。

イエスが再臨されるときに生きている信徒たちは、一瞬にして変えられ、キリストを信じて死んだ者と同じように朽ちない復活の体をいただきます。

イエスの復活の体はどのような姿でしょう。

イエスの復活は、イエスに従う人々のために起こるべきことの「初穂」とであるという表現が何度か登場しました。初穂とは収穫の最初の部分です。初穂があるなら、まだまだ多くの良いものが収穫できると確信できます。

または、暑い 7 月の大阪ではなかなか想像しにくいかもしれませんが、こう考えることもできます。雪をかきわけて芽吹く花は冬の終わりを告げるしるしであり、これから生まれる新たな命の存在を知らせてくれます。

私たちの復活の体がどのような姿かを理解するために、イエスが復活なさった後どのような姿であったかを示す聖書個所を見てみましょう。

マタイ 28 : 9 で、マグダラのマリヤともうひとりのマリヤが墓に行くと、墓は空っぽでした。マタイは次のように記しています。

9 すると、イエスが彼女たちに出会って、「おはよう」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。」

ですから、イエスが復活なさったとき、肉体の体があって女の人たちはそれがイエスだと認識できました。そして、触れることができました。

ルカ 24 : 39 で、イエスを見た弟子たちが幽霊を見たと思って騒ぎ始めたとき、イエスは次のようにお答えになりました。

36 これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真ん中に立たれた。37 彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。38 すると、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」

それから、何か食べ物があるかとお尋ねになります

40 イエスはこう言われて、その手と足を彼らにお示しになった。41 それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。42 それで、焼いた魚を一切れ差し上げると、43 イエスは、彼らの前で、それを取って召し上がった。

つまり、復活の体は食事もできるのです。

ヨハネ 20 : 27 で、イエスは弟子たちの前に再び現れておられます。トマスはイエスの体に触れることができました。イエスはおっしゃいました。

それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

これに対してトマスは、イエスが肉体的にも死からよみがえられたと納得し、こう叫びました。

「私の主。私の神。」

私たちの復活の体はどのような姿でしょう。

主と面と向かってお会いするまではっきり分からないことはたくさんありますが、私たちの体は、イエスが死からよみがえられたときの体のようになると確信することができます。

ピリピ 3 : 21 をはじめ、多くの聖書箇所が次のように語るからです。

キリストは、… 私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

私たちは、もともとの体を完ぺきにされた形で復活すると理解することができます。罪と墮落から完全に解放された体です。病気などに二度と冒されない体です。

ジョニー・エレクソン・タダという四肢まひを持つアーティストの女性について聞いたことがある人も多いでしょう。彼女は著書「天国へ帰るべき我が家」で次のように語ります。

「私はいまだに信じられない。自分のこんなにしわがよって曲がった指、萎縮した筋肉や、こぶのようになった膝、肩から下が麻痺したこの体が、いつの日か、新しい体になるということが。そしてその体は軽やかで、輝きに満ち、義をよそおい、力あふれてまばゆいほどだということも。この事実は、私のように脊椎破損をした者にどれほどの希望を与えるか、あなたが想像できるだろうか。また躁鬱病の患者にとって、このような希望がどれほどの光を与えることかを。どんな宗教も哲学も、新しい肉体、新しい心と知力を約束してはいない。ただ、キリストの福音の中にだけ、傷つき病む人は、信じられないような喜びと希望を見いだすのだ。」(ジョニー・エレクソン・タダさんの「天国」より引用)

なぜ私たちは栄光に満ちた復活の体を受けるのでしょうか。

なぜ復活の体が必要かについて詳しく説明する時間はありませんが、少し触れたいと思います。

簡単に言うと、私たちにはイエスの復活の体のような体が必要になります。それは、将来私たちがすべきことを主がたくさんご計画なさっているからです。

雲の上のどこかで永遠にハーブを弾いて過ごすわけではありません。この地上の新しい天と地で永遠を過ごすのです。キリストとともに新しい地上を支配し、意義のある生産的な働きに関わります。そうして私たちは大きなやりがいを得ます。

ランディ・アルコーンはこう語ります。

「神は私たちに新しくされた心とからだを与えてくださる。それは私たちが完成されたものとなり、活力と将来へのビジョンに満ちあふれて、神の栄光のために、新しい任務を果たしたいと熱心に願うものとなるためである。」

主にあってしっかりと立つ。

パウロは、聖なる不満を持ちつつ、ゴールを目指して進み続けるようにと力強く励まし、ピリピ 4 : 1 のことばでこれを締めくくります。

天国、そして復活の朽ちない体を受けて新しい地上で生きる人生というすばらしい希望があるので、「このように主にあってしっかりと立ってください。」とパウロは命じます。

つまり、私たちがいつの日か栄光の体を受け取り、罪に汚された世に住まなくなる日が来るという事実を念頭に、信仰によってしっかりと立ち、キリスト・イエスにおいて神が召してくださったゴールを目指して前進しようということです。

ヘブルの著者が 12 章 2-3 節で語るように、つらいときも元気を失ったり疲れ果ててしまわないために、イエスから目を離さずに頑張りましょう。

今朝最初にご紹介したフローレンス・チャドウィックを思い出してください。彼女の話は、岸にたどり着く 1km 手前で棄権した敗北で終わりません。2 カ月後、彼女はふたたび、カタリナ島からカリフォルニアの海岸を目指して泳ぎました。このときもまた、前回と同じように濃い霧に包まれ行く先が見えなくなりました。けれども、彼女は泳ぎ切りました。後に彼女はこの時を振り返り、頭に海岸線のゴールをずっと描いていたと語りました。フローレンスは無事泳ぎ切っただけでなく、女性と男性のそれまでの記録を 2 時間も上回りました。

希望を持って待つ。

先ほど、ジョニー・エレクソン・タダさんの言葉を引用しました。彼女は著書「天国へ帰るべき我が家」である日の出来事を紹介しています。その日はコルセットに身が挟まるので、コルセットをつけ直すために、4 度も秘書のフランシーに車椅子からベッドへ運んでもらうよう頼まなければならませんでした。フランシーは仕事を終えて帰るとき、ジョニーを気の毒に思っただけでなく、ローマ 8 : 23 を引用しました。

22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。23 そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

ジョニーはこのみことばを思いつつ、神にこのように祈ったと記します。

「そうです、主よ。私は健康になること、痛みを知らない体を願っています。けれども、本当にほしいのは、投げ出したりやめたりしたいと思わない新しい心です。」

ローマ 8 章には、私たちの体の贖いについてこのようにも記されています。

24 私たちは、この望みによって救われているのです。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

将来、たくましくてきらめくような体を受け取る日が待ち遠しいことです。私はそんな体がいただけるのを楽しみにしています。

皆さんはどうでしょう。復活の体のどんなところが楽しみですか。それ以上に、心はどうでしょう。罪を犯す誘惑から解放された心は楽しみではありませんか。

ヨハネは第一の手紙で次のように記しました。

2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそ

のとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。3 キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

ですから、私たちもジョニーのように祈ることができます。希望を持って忍耐強く待つことができるように、そして心がさらにきよめられるように、御霊の助けを求めましょう。

神の御国が将来のいつか新しくされた地上で実現するのをただ何もせず待つというのは、私たちに対する神のみこころではありません。

天に国籍を持つ私たちには国民としての責任があります。

最後に、こうして学んだことを日常生活で実践するために、次の聖書箇所について考えていただきたいと思います。

ルカ 4：43 でイエスは次のようにおっしゃいました。

しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、どうしても神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」

そしてルカ 9 章で、イエスは弟子たちを遣わされました。

1 イエスは、十二人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威とお授けになった。2 それから、神の国を宣べ伝え、病気を直すために、彼らを遣わされた。

使徒の末尾には、ローマにいたパウロの様子が記されています。

30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

イエスはマタイ 24：14 で語られます。

14 この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。

ここで、皆さんに祈りをもって考えていただきたいことがあります。

この大阪で神の御国を宣べ伝え、神の御国の国民としての使命をまっとうするために、あなたはどんなことができるでしょう。

OIC という教会が天の国民として生き、行動する、ということは実際にどんなことでしょうか。自分たちが置かれた地域社会に神の御国の影響をもたらすとは実際にどういうことでしょうか。

この地上に神の御国を目に見える形でもたらすことができる具体的な方法を示してくださいと、私たちの王であり救い主であるお方に祈ってみてください。

祈り

天の父よ、あなたの御名はどんな王や支配者よりもたたえられるべきです。

あなたの御国には終わりが無いことを感謝します。私たちは、あなたの再臨のときにその御国が来ることを、喜びをもって待ち望んでいます。

あなたの復活を私たちは喜んでいます。あなたが罪と死に打ち勝たれただけでなく、あなたを信じる者のために約束された復活の体をご自身が原型となって示してくださったからです。

障害や病気などがあって、とくに体の贖いを待ち望んでいる人たちを覚えて祈ります。

どうか、私たちを強め、地上にあなたの御国をもたらすご計画の一端を担えるように私たちを整えてください。

この地上で天国を垣間見ることができるよう、私たちに何ができるのか示してください。私たちが置かれた大阪で今週何ができるでしょうか。

あなたの栄光があなたの教会をとおして世間に示されるためです。これらのことをイエスの御名によって祈ります。アーメン。